

「初夏のキノコ(7)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

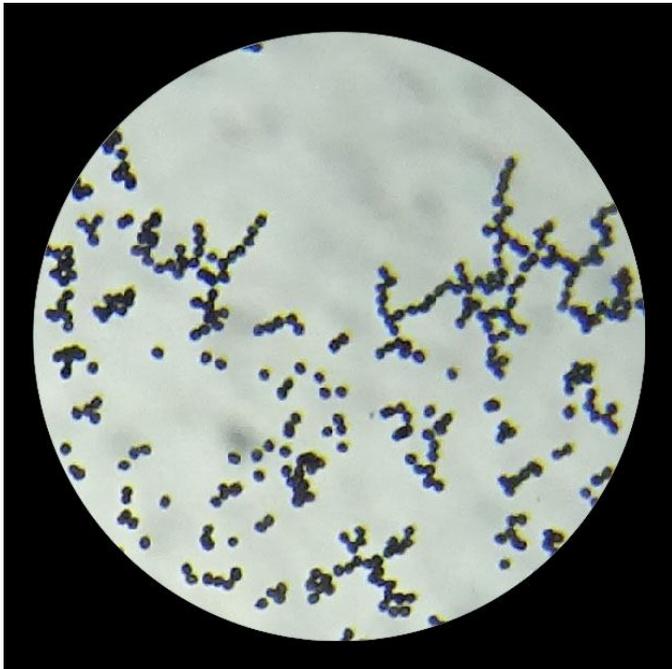
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

担子器の観察は難しいが、孢子だけなら簡単に観察できる。下の写真のように、キノコをスライドの上に伏せて置くだけで良い。



これはカワリハツの傘の一部(表皮ははがれてしまった)を、スライドの上に伏せたところだ。この状態で30秒~1分もすると、すでにスライド上に大量の孢子が落ちる。

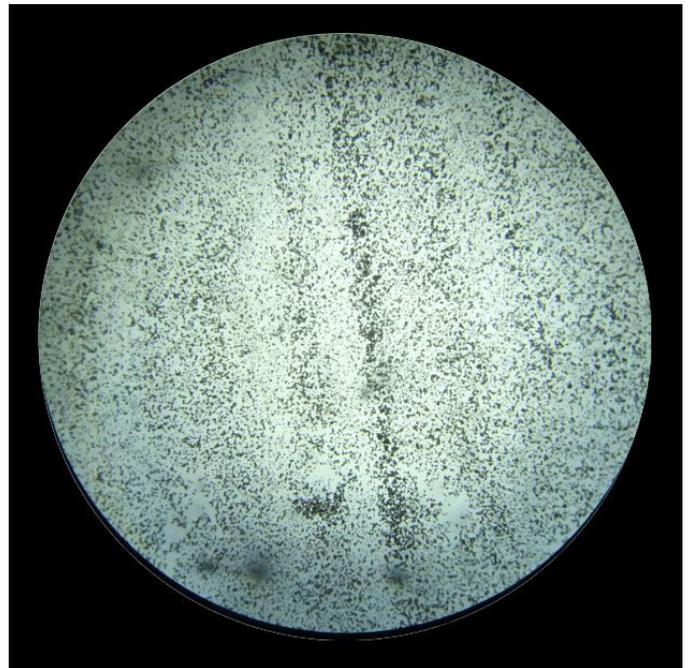


これがその孢子を顕微鏡で見た様子だ。倍率は100倍なので、視野の実直径は1mmほどだ。わずか1分で、**1mm<sup>2</sup>**以下の面積に、数百個の孢子が落ちている。孢子同士がくっついていて、分子模型のような不思議な模様を作っている。

スライドにキノコを伏せて数時間置くと、ヒダの様子がわかるほど孢子が落ちる。本来は、色の薄いヒダ(白に近い色の孢子)の場合は黒い画用紙、色の濃いヒダ(黒や茶色の孢子)の場合は白い画用紙の上に伏せる。微風でも孢子は飛散してしまうので、上にコップをかぶせておくと良い。



こうしてできた孢子の様相である。これを「孢子紋」といって、この色もキノコの同定には重要である。



これは、孢子紋を低倍率(×40)で観察したところだ。いくつもの孢子の筋が見られる。筋は孢子が密集しているところで、ヒダとヒダの隙間だった場所である。孢子の総数は数えようもないが、日本最大級のキノコ「オニフスベ」の場合、1つの子実体を作る孢子の総数は、数億個に達するという。ほとんどは無駄玉だろう。もし全部の孢子が育ったら、地球上はオニフスベで埋め尽くされてしまうはずだ。